プロローグ

雨粒が窓を叩く。外は冬の嵐だ。雲は重く垂れ込め、ビルの谷間で風が唸(うな)る。

雨粒はリズミカルに窓を叩く。まるで気短なノックのように、数知れない小さな拳(こぶし)が、古びた木枠のなかで傾(かし)いだガラスを叩く。

パテが痩せてガラスの傾いだ窓の内側には、幼い女の子が頬杖をついていた。額と鼻の頭が、ほとんどガラスにくっつきそうだった。隙間風に、女の子の不揃いな前髪がときおりふわりと舞い上がる。

六畳一間のアパート。女の子の後ろでは、彼女の母親が窓に背を向け、薄い布団にくるまって眠っている。木造二階建て、女の子はおろか彼女の母親が生まれる二十年も前からここに建っている老朽アパートは、強い西風が吹きつけるたびに、土台から震える。

女の子が細い息を吐くと、その温もりでガラスは一瞬だけ白く曇り、すぐ元に戻る。

室内は冷え切っていた。女の子は頭からすっぽり母親のコートをかぶっていた。小一時間前にトイレに起きたとき、母親がそうしてやったのだ。裏地が破れ、くたびれきったコートだが、それでもウール製で生地は分厚く、重たい。女の子は顔だけを覗(のぞ)かせて、コートのなかに潜っている。

つい一昨日(おととい)、女の子は五歳の誕生日を迎えた。同じ日に、この部屋の電気が停められた。母子の窮状を察し、集金係もずいぶん融通をきかせてくれたのだが、

――滞納が十ヵ月分になるからね、一度は停めないといけないんだ。ひと月分でいいから、何とか工面して入れてくれないか。そしたらすぐ電気を使えるようにしてあげられる。

ほかにもいろいろと、集金係は話をしてくれた。区役所に相談しなさい。大家さんに聞けば、民生委員を紹介してもらえるんじゃないか。とにかくこのままじゃいけないよ。奥さんは具合が悪そうだし、子供さんは小さいんだから。

はい、はいと、女の子の母親は答えた。そうしてみます。ご親切にありがとう。ひと月分くらいの電気代なら、すぐ工面できます。ええ、友達に頼んでみます。営業所へ行けばいいんですね？

私に電話しなさいと、集金係は言った。すぐ来てあげるから。電話は使える？　電話代はあるかい？　あります、ありますと母親は答えた。携帯電話はとっくに使えなくなっているけれど、公衆電話からかけますから。

集金係が去った後、しかし女の子の母親は寝込んでしまった。集金係が言うとおり、彼女は具合が悪かった。集金係が察しているよりも、もっとずっと具合が悪かった。トイレへ行って戻るだけでも、まともに歩くことができずに這うようだった。

母親のそばについていると、彼女の熱で温かい。だが母親は女の子を遠ざける。ごめんね、でも風邪が感染っちゃうから。いい子にしていてね。少し寝ていれば、ママ治るから。

そうして、ずっと寝ている。ずっと温かい。熱いほどに温かい。なのに母親に触れると、その身体が震えていることが女の子にもわかった。母親が咳き込むと、その痩せた身体がヘンなふうによじれるみたいになるのもわかった。

今、何時だろう。空が真っ暗なので、もう夜みたいだ。薄暗い六畳一間には、蛍光色にほのかに光る目覚まし時計がひとつあるが、女の子はまだ時計がうまく読めないのだ。

一陣の突風が吹きつけて、老いぼれアパートがまた胴震(どうぶる)いするように揺れた。

女の子は何度かテレビをつけてみようとして、どのスイッチを押しても駄目だと知った。電気が停まるとテレビも見えない。それがまだ、女の子には理解できなかった。母子はこれまで様々な困難に直面してきたし、電気が使えなくなってしまうのも初めてではない。だが女の子はあまりに幼く、母親が直面しては乗り越えてきた困難の質も、その理由も、その原因もわからなかった。

そして、今度という今度は乗り越えられないかもしれないという、不吉な可能性も。

――寒いときでよかった。冷蔵庫の中身が腐らないから。

集金係が帰ったあと、母親はそう言った。

――おなかが空いたら、何か食べるのよ。マナちゃんの好きなクマちゃんのパンがあるからね。

クマちゃんのパンは、とっくに食べてしまった。冷蔵庫の中身が腐らないのも気温が低いからではなく、もともと中身なんてないからだった。空っぽなのだ。

女の子は飢えていた。女の子は寒かった。今、高熱にうかされて、襲いかかってくる激しい咳の発作に身体を揺さぶられるとき以外はうつらうつらと夢を見ている母親よりも、女の子が感じている飢えと寒さは厳しかった。

ガラス窓を雨粒が打つ。大勢の小さな拳がノックするように急(せ)き込んで。出ておいで、出ておいで、出ておいで。そこにいちゃいけないよ。ママは病気だ。誰かに言わなくちゃいけないよ。ママが病気で、あたしは寒くておなかがぺこぺこだって言わなくちゃいけないよ。

女の子はまだ、うまくしゃべることができない。生活に追われ、女の子は保育園にも幼稚園にも行ったことがなかった。母子は社会という大きなケーキからそっくりスプーンですくい取られている。そのスプーンは冷え冷えとして宙に浮いているだけで、母子をどこかに運んでくれることも、おろし

てくれることもなかった。
女の子はガラス窓に息を吹きかけた。おなかは空っぽだけど、息は出てくる。ガラスが曇る。すぐ元に戻る。分厚い雲から降り注ぐ銀色の雨脚が見える。
女の子はこのアパートが好きだった。遠くに大きなビルがたくさん建ち並んでいるのが見えるからだ。その窓という窓に明かりがつき、まるでクリスマスツリーみたいだ。
ここへ来たとき、ママは教えてくれた。あのビルはみんな、四十階ぐらいあるのよ。とっても高いの。すごく速いエレベーターに乗らないと、てっぺんまで行かれないの。
あのビルの群れと、この古びた建物の寄り集まった町の一角は、けっして遠く離れているわけではない。大人の足なら歩いて行き来できる距離だ。現にたくさんの人が歩いているのを、女の子は見たことがある。
彼方のビル群とこのアパートのあいだにも、建物はたくさんある。町は建物に埋め尽くされているのだ。クリスマスみたいなあのビル群からひとつを取り出して小さく縮めたみたいなものもあれば、横に平たい灰色の建物もある。大きな赤い屋根がついている家もあるし、灰色の屋根がデコボコしている家もある。いちばん多いのは、夜になると派手な明かりがつく看板を載せた建物だ。小さいのもあれば大きいのもある。きれいなのもあれば薄汚れているのもある。
色や形や大きさのほかに、女の子にとってもっとも大事な違いは、その建物に明かりがつくかどうかということだった。女の子は町の明かりが好きだった。建物が放つ色とりどりの光。みんなクリスマスツリー。いつだってクリスマスだ。
だから目に入る景色のなかで、たったひとつだけ、いつどんなときでも明かりがつかないある建物が、女の子は怖かった。アパートのこの窓から、まっすぐ正面に見える。今、雨に煙(けむ)る夕闇のなかで

も、その建物だけは黒々と沈んでいる。

数の数え方は、ママが教えてくれた。ひとつ、ふたつと指を折るのだ。あるいは指さして、声をあげて数えていく。そのやり方でいくと、その建物はこのアパートから信号を三つ渡った先にあった。本当は建物の数で数えたいのだけれど、両手の指の数を超えると、女の子にはまだわからない。だから信号を数えるのだった。

風変わりな形の建物だった。ママはあれもビルだと教えてくれたけれど、遠くに見える四十階もあるビルの群れとは形が違うし、もう少し近くに見える、壁がみんなガラスになっているビルとも違う。

女の子はそれを、クッキーの缶にそっくりだと思った。ずいぶん前に、ママがお客さんにもらったというクッキーの缶。ミッキーマウスの絵がついていた。中にはココア味のクッキーが入っていた。

――こういう形を、〈つつ〉というのよ。

ママはそう教えてくれた。

――いつもクッキーが入ってるわけじゃないわ。お茶とか、キャンディとか、中身はいろいろなの。

その筒型のビルは、女の子が窓から外を見れば、そこにある。女の子と、彼方にあるクリスマスのようにきらびやかな高層ビル群とのあいだに、黒い杭でも打ち込んだように。

いち、にぃ、さん。ママと一緒に指さして数えると、その筒型のビルは四階建てだった。

――きっと、使われていないのね。

誰も住んでいないんでしょうと、ママは言った。

空っぽなのだ。だから明かりがつかない。人が出入りすることもないのだろう。昼間の明るいときに見ても、窓が開け閉てされることはなかった。

その筒型のビルは、てっぺんもちょっと変わっていた。手すりではなく、規則正しくデコボコした

壁がぐるりを巡っているのだ。そしてその一角の壁が切れたところ、女の子から見ると向かって左の端に、何かが座っているのだった。

初めて見たときは、人だと思った。このアパートに越してきたその日の昼間で、だからあのビルに明かりがつかないことに気づくよりも前。ママ、ママ、あんなところに誰か座ってる！

女の子と一緒に窓から覗いたママも、最初は驚いた。それからちょっと首を動かしたり伸び上がったりしてよく観察すると、

――あれは人じゃないわ。マナちゃん、あそこに何か銅像みたいなものがあるのよ。きっと屋上の飾りね。

銅像。置物だというのだ。

――公園で見たことがあるでしょう？　でも、あれはちょっと珍しいわね。

そうなのだ。ほかでは見たことがない。女の子が「誰かが座っている」と言ったのは、ほかに言い様がなかったからだ。あれは「誰か」じゃない。だって背中に翼があるんだもの。

翼のある背中を丸め、大きな足を縮めて、楔（くさび）のような黒いビルの屋上にうずくまる、あれは何だ。

女の子の目には、それは怪物だった。テレビで観る映画や、絵本のなかに出てくる闇の怪物。翼を広げて舞い上がり、鋭い鉤爪（かぎづめ）で人を襲う。近くへ行って、できるならあの屋上に登って、よく見てみたい。でも、近づいたらあれが動き出すかもしれない。だってあれは怪物だもの。

女の子は毎日、怪物を見ていた。それが動かないことを、こっちに近づいてこないことを確かめるために。窓から眺める大好きな景色のなかにうずくまっている怪物を。

冬の嵐のなか、自分の呼気だけを温もりに、母親のコートをかぶって窓から外を眺めている女の子の前で、銀の雨粒に打たれながら、今夜もあの怪物はそこにいた。雨脚が激しいせいで、ときどきよ

く見えなくなる。そのたびに女の子は目を凝らした。

怪物はあそこにいる。ただの置物なんだ。怖くなんかない。

五歳の女の子の背後では、彼女のたった一人の保護者であると同時に、自身も切実に保護を必要としている母親が、肺炎で死にかけている。死がそこに迫っていることを、女の子は知らない。死を知識として理解するには、まだ幼すぎるからだ。

だが、生きものとしての彼女の本能は知っている。死がやってくることを。母親を迎えにやってくる。疲労と困窮のうちに力尽きようとしている不運なシングルマザーを連れ去り、彼女の一人子、「マナ」という名を呼ぶ者さえ母親しかいない女の子を、この六畳間の暗がりに置き去りにするために。

死が迫り来る。女の子はそれを感じている。母に寄り添うことを禁じられ、窓から外を眺めるだけ。しかし女の子は見張っているのだ。今、死がどこまできているか。それはあの怪物が教えてくれる。あれが動いたら、背中の翼を広げたら、あのデコボコした壁を蹴って舞い上がったならば。

毎日、毎日、あの怪物を見ていたのは、いけないことだったのだろうか。ずっと見ていたから、あいつがママとマナに気づいてしまったのだろうか。

またママが激しく咳き込み、その喉が鳴った。窓から吹き込む隙間風そっくりの、ひゅうひゅうという喘鳴。

雨が窓を濡らし、視界がぼける。女の子は小さな手でガラスを拭う。その冷たさに、腕に鳥肌が立った。

怪物がこっちにくる。動き出す。見ていた方が怖くないか。見ない方が怖くないか。ママの布団に潜り込み、その背中に背中をぴったりと押しつけて。

ママ、怪物がくる。
母親の喉が、空気を求めて空しくあえぐ。
そのときだった。
真っ黒な杭のような廃ビルの屋上に、突然、何か大きな影が現れた。うずくまるあの怪物のすぐそばに、ふわりと舞い降りるように。
そう、それには動きがあった。スイッチを押してぱちりとついたというふうではなく、何か物陰から現れたというのでもなく、まさに降りてきた。
――空から降りてきた。
分厚い雲のなかから、銀色の雨のつぶての向こうに。
うずくまるあの怪物よりも、新しく現れた影は大きかった。その漆黒のシルエットは人の形をしていた。髪が長い。手足も長い。
そしてその背中にも、翼があった。